

# 日本語学習者の人生の径路に表れる日本との接触 —— 日本に住み、働きつづける日本留学経験者 E の場合 ——

## How the Contact with Japan Appears in the Trajectory of Life of a Japanese Language Learner: Case Study of Ex-Overseas Student E Who Keeps Living and Working in Japan

丸山千歌・小澤伊久美  
MARUYAMA Chika, OZAWA Ikumi

### 〔要旨〕

外国人労働者の受け入れ拡充に合わせて、日本語教育人材の育成、日本語教育機関の整備について検討が進められている（文化庁、2019、2022）。このような時代において、非日本語母語話者である日本語学習者が「日本語・日本社会と向き合って生きていこう」と考えるに至る径路や、そこに影響を与える要因を明らかにすることは、知日派の育成を考える上で重要である。

そこで、本稿は、PAC分析法とTEAを用いて、日本での1年の交換留学を経て大学を卒業してから日本に住み、働き続けることを選択して数年以上経過している元日本語学習者が、日本での日本語学習や経験をどのように意味づけているかを考察する。本稿の分析結果は、日本語・日本社会と向き合って生きていくのに、人とのつながりがより重要である点が丸山・小澤（2018、2019、2020、2021a）より顕著に表れている。その点で、今後日本語教育関係者が日本語教育の現場をどのようにとらえるかについての示唆を与えるものである。

**Key word:** 日本留学、日本語学習、卒業後の進路、転職、人とのつながり



## 1. はじめに

2018年の「出入国管理及び難民認定法」改正以降、「日本語教育の推進に関する法律」の公布・施行、「日本語教育の質の維持向上の仕組みについて（報告）（案）」の公開等、外国人受け入れを視野に入れた日本語教育の拡充と整備が急速に進んでいる（入国管理局、2018、文化庁、2019、2022）。この時流の中で、日本語学習者のキャリア形成という観点がかかせず、非日本語母語話者である日本語学習者が「日本語・日本社会と向き合って生きていこう」と考えるに至る径路や、そこに影響を与える要因を明らかにすることは、今後の日本語教育の現場づくりを考える上で重要である。

丸山・小澤（2018、2019、2020、2021a）は、個人別態度構造分析（PAC分析法）（内藤、2002）と、複線径路等至性アプローチ（TEA）（サトウ・安田、2023）を組み合わせ、日本での1年の交換留学を経て大学を卒業し、日本に住み、働き続けることを選択して数年以上経過した元日本語学習者が、日本での日本語学習や経験をどのように意味づけているかを分析している。こういった研究は、今後の日本語教育の現場設計に示唆を与えるものである。本稿は、前掲の一連の研究の続きとして、元日本語学習者Eを取り上げ、文化心理学の考えに基づき、日本への留学経験を持つ日本語学習者らの人生の径路の解明を試みる。

## 2. 先行研究

本稿は、丸山・小澤（2018、2019、2020、2021a）の一連の研究の続きとして、文化心理学の考えに基づき、日本への留学経験を持つ日本語学習者らの人生の径路の解明を試みる。

文化心理学は「個人が日常的に相互行為を行う他者や人工物（道具）」（上村、2018：277）を文化と捉え、「自己と文化とが相互に関係しながら個人が文化を創り上げる」（木戸、2019：10）と考える。文化心理学の第一人者であるヴァルシナーは、「記号」を「未来と向き合う何らかの機能を持ち、過去の状態から何か新しいことへと導く何か」とであると定義しており（サトウ、2019：36）、小澤・丸山（2019a、2019b）、Ozawa and Maruyama（2019）、丸山・小澤（2018、2019、2020、2021a）はこの考えを取り入れた研究である。

本研究ではTEAを用いているが、TEAは、歴史的構造化ご招待（Historically Structured Inviting: HSI）、複線径路等至性モデリング（Trajectory Equifinality Modeling: TEM）、発生の三層モデル（Three Layers Model of Genesis: TLMG）の3つの方法論的理論によって構成されている質的研究法に関する総体のことである（上川、2023：7）。TEAは「異なる人生や発達の径路を歩みながらも類似の結果にたどり着くことを示す等至性（Equifinality）の概念を、発達の・文化的事象に関する心理学研究に組み込んだヴァルシナー（Jaan Valsiner）の創案に基づいて開発され」という歴史的経緯がある（安田、2019：16）。丸山・小澤はその一連の研究において、HSIとTEMを主に用いているが、丸山・小澤（2022）では、やまだ（2020）の多声モデル生成法に基

づいて丸山・小澤（2021a）を再分析し、TEA が質的研究によるモデル生成法として提案された多声モデル生成法の一つの在り方として機能することを示した。

本研究は、丸山・小澤（2018、2019、2020、2021a）とは異なる選択、具体的には日本での1年の交換留学を経て大学を卒業してから、転職により日本国内外の勤務場所を移動しつつ、日本とつながって働き続けることを選択して数年以上経過した元日本語学習者 E を対象者として HSI により「お招き」し、PAC 分析法と TEA の両方を活用して分析を行う。

### 3. 方法

#### 3.1 調査協力者の概要

調査協力者はインタビュー実施当時、日本の永住権を取得し、都内の日本企業に勤務している日本語非母語話者（以下、協力者 E）で、仕事面で今後も日本・日本語と関わりながら生きていく意思を持っている。将来の居住地は日本でない可能性があると考えている。概要は表 1 の通りである。香港の大学で英文学科に所属し、交換留学により日本に1年滞在、留学中は給付型奨学金を得た。留学中に東日本大震災を経験した。留学後は日本語学習に力を入れ、大学卒業後は日本の企業に就職し日本に居住した。その後香港の日系企業に転職、2019年の香港でデモを経験し、香港を離れて生きることを考えるようになる。その後、日本企業に転職し、その後日本の永住権

表 1 協力者 E の概要

出身地	香港
年齢・性別	30代・男性
職業	日本（東京）の企業に勤務
言語背景と日本語学習歴	香港で育つ。小学校入学前に日本に家族で旅行する機会があり、日本食と出会う。小学校では日本旅行について調べ学習を行い、日本について少し詳しくなる。中学校入学後は、中国史の授業で日本との関係性に興味を持つようになった。プラレールにも強い関心を持ち買いためるようになる。大学入学前は民間の日本語学校で日本語を学習。大学は英米学科に進学した。1年の日本への交換留学を予定していたが、留学中に東日本大震災を経験する。日本留学は珍しい体験、ポジティブな体験、思い出や人生を変えてくれる体験ができた日本にいたいという気持ちが固まり、所属大学との交渉を経て、留学を完遂した。留学後は日本語をマイナー科目として履修し学習を継続するとともに、日本からの留学生との交流活動を行った。学部卒業後は日本の企業に就職し日本に移動、その後日系企業への転職で香港に戻る。2019年の香港でのデモを経験し、日本への移住を視野に入れるようになり、転職して日本に住むようになる。将来の居住地は日本、英国の両方を視野に入れているが、日本や日本語とつながって仕事をする意思を持ち続けている。漢字圏。
母語	広東語
インタビュー実施時期	1回目：2022年3月21日（約9時間半） 2回目：2022年4月3日（約4時間15分） 3回目：2022年4月17日（約3時間10分） 4回目：2022年7月24日（約2時間）

を取得した。現在は英国への移住も視野に入れているが、日本や日本語と関係を持ち続けて生きる意思を持っている。インタビューはオンラインで3回行った。研究はTEAで言う等至点(EFP)を<日本や日本語と関わりを持ち続けて、日本で生活し続けること>と想定して開始した。

### 3.2 インタビュー方法

本研究はPAC分析法とTEAを複合的に活用する。具体的には、協力者Eに同意を得た上で筆者らが4回インタビューを行った。まず1回目と2回目はPAC分析インタビューを行い、3回目はTEM図を作成するためのインタビューを、4回目はTEM図を確認するためのインタビューを行った。

PAC分析法は、丸山・小澤(2022)と同様の理由から採用した。すなわち、調査項目の設定の自由度が各段に高い、また調査協力者が中心となるという特徴(丸山、2016)を生かして、インタビュー実施者と協力者とが、インタビュー実施者の協力者に期待するストーリーを共同で構築するリスク(佐藤、2015)を低減することを試みた。

PAC分析で使用した刺激文は「わたしと日本・日本語の過去・現在・未来と聞いて思い浮かべるのはどのようなことですか。あなたが思い浮かべたことを言葉やイメージで表してください。書くときには思いついた順に、順位の番号を付けてください。」である。

## 4. 結果

### 4.1 PAC分析インタビューの結果

PAC分析インタビューは内藤(2002)の手順で進め、協力者Eは100の連想語を挙げた。統計処理は、重要度順に並べた各連想語の非類似度評定をSPSS version20を用いて階層的クラスター分析にかけるといった手順をとったが、その結果描画されたデンドログラムおよび各連想語と重要度順位、印象、4つのクラスターの名付け、全体のクラスターの名付けを図1に示す。

PAC分析インタビューで、協力者Eはこれを4つのクラスター(以下、CL)に分けることに同意し、各CLを次のように名付けた。重要度順 11, 90, 40, 10, 59, 4, 58, 23, 12, 65, 9, 51, 13, 22, 45, 14, 46, 17, 21, 18, 75, 53, 84, 80, 94, 37, 96, 98, 99, 86, 92, 48, 85, 57の34項目から成るCL1は《自分が日本に暮らしてみても思ったこと》、64, 67, 30, 68, 66, 50, 83, 52, 7, 82, 1, 6, 5, 2, 41, 20, 47, 28, 29, 31, 35, 33, 34, 32の24項目から成るCL2は《日本の社会問題》、42, 77, 55, 81, 54, 24, 91, 93, 16, 69, 3, 78, 36, 89, 88, 95, 25, 26, 60, 63, 8, 97, 49, 61の24項目から成るCL3は《日本語と人間関係》、15, 44, 38, 43, 39, 100, 62, 76, 70, 73, 19, 72, 71, 56, 79, 74, 27, 87の18項目から成るCL4は《紙と筆》、CL全体は《僕と日本の関係(副題…好きと嫌いを超えた関係)》と名付けた。

なお、本稿では以下、協力者Eの挙げたCL名は《 》、連想語および発話からの引用は「 」をつけて示す。また、筆者らがTEAによる分析をした結果、社会的方向づけ(Social Direction: SD)や社会的助勢(Social Guidance: SG)などの概念によって捉えたものは< >をつけて示

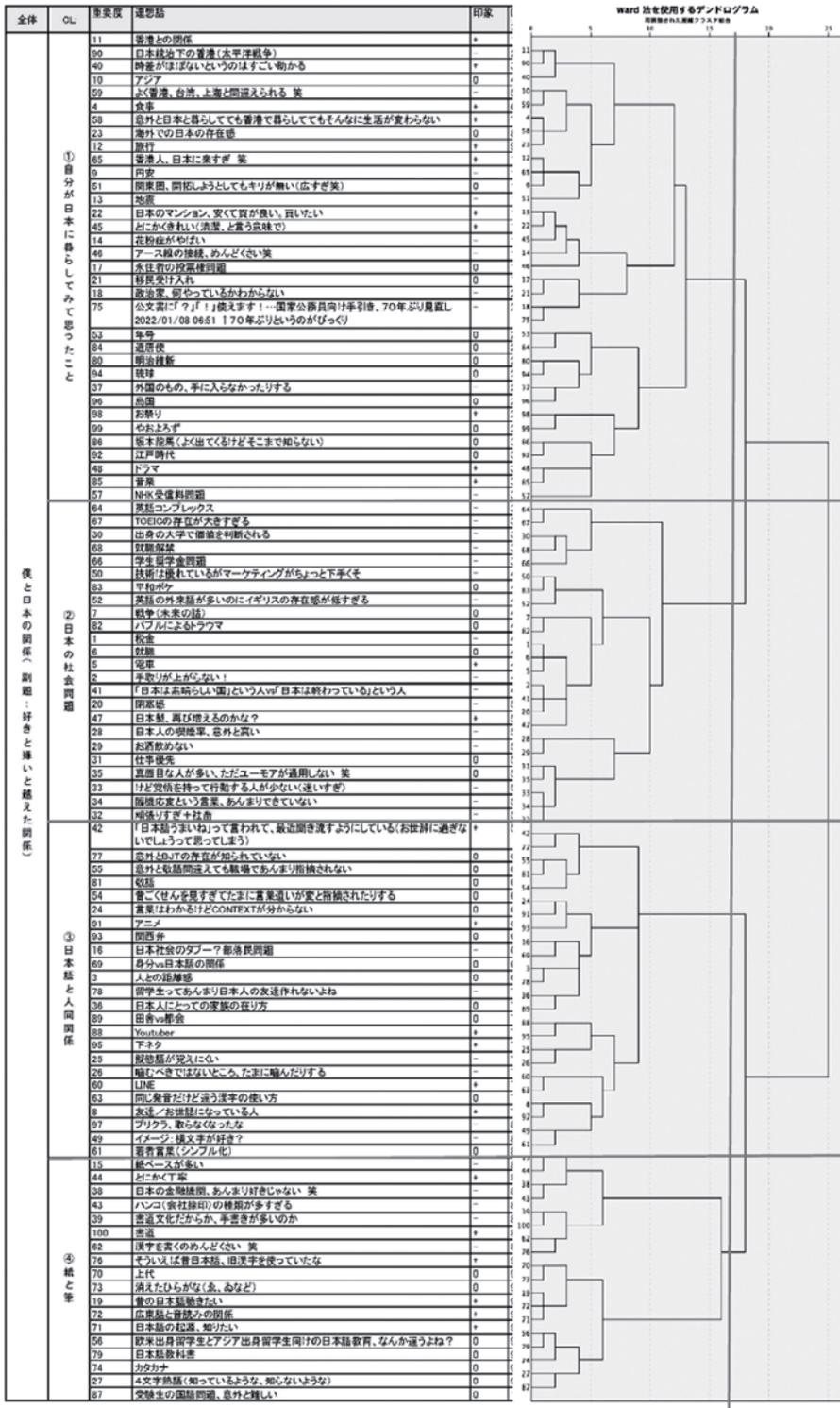


図1 協力者Eのデンドログラム、連想語と重要度順位、印象、およびCLの名付けの内訳

すこととする。

まず、各 CL の印象に関するインタビュー結果をまとめる。CL1 について、歴史的な部分やアイデンティティー、日本での生活に関する問題といった3つの要素が入っているとした。たとえば、「香港との関係」と「明治維新」には関係性があるとし、数年前に訪れた大阪造幣局には、明治維新のころ、当時イギリスの植民地だった香港から、硬貨を作る機械を購入したと聞いて、意外と日本の現代化と香港がつながっていることに気づいたというエピソードを紹介した。また、日本で暮らしているので、花粉症や地震など、どうしても香港での生活と日本での生活を比べたりすることにも言及した。「旅行」について、富士山の下を走る新幹線のイメージが、「これぞ、ザ・ニッポンという感じ」で、アジア人の観光客が大勢日本に遊びに来ているイメージを挙げた。CL1 のタイトルは《自分が日本に暮らしてみても思ったこと》であった。

CL2 は、自身が暮らして気づいた日本の社会問題や、カルチャーショック、日本人の性格の部分などの些細な日常の気づきがまとまっているとした。CL2 のタイトルが《日本の社会問題》としたが、このまとまりについて、一言で言うところ「将来が不安」ということで、これについては、「外国人である自分だけじゃなくて、日本生まれ日本育ちの人も思ったりすることじゃないかなと思うんです」と述べた。一つの場面を思い浮かべるとすると、酒に酔い2次会で疲れて、電車で揺られながら一人で寂しく帰るサラリーマンの姿が思い浮かぶとした。

CL3 は、タイトルを《日本語と人間関係》とし、交換留学先の寮での断片的なエピソード等、日常のシーンを思い浮かべた。例えば、2016 年に香港に戻った折に、youtuber の動画を見て、SNS はこのように変化するという事について気づいたことや、寮生活で日常的に経験し、現在でも職場で経験すること、すなわち、部活動や、芸能人のことは自身は知らないで、言葉は分かるが context は分からない状況が起きると説明した。情景は、留学したばかりのころに、寮長が寮の設備などを紹介してくれた情景を挙げた。

CL4 のタイトルは《紙と筆》で、暗い部屋の書庫などに、日本語で書かれていて、昔の日本語で書かれたものも混じっている書類が山ほどたまっているイメージを挙げた。そして、「ちょっと入りたくない」「興味はあるものの入りたくない」イメージがあると付け加えた。

次に CL 同士の関係を見る。CL1 と CL2 で共通しているのは、どちらにも社会問題の部分に関する連想語が出ていること、また、日本で暮らしてみないと気づかないこと（「アース線の接続」「手取りあがらない」等）であった。一方、相違点は CL1 には、香港など自身にまつわる連想語や歴史に関わる連想語が入っているのに対し、CL2 は目の前にあるような問題だとした。CL1 と CL3 で共通しているのは、日本と自身が現在のように関わりがなかったら、どちらも思い浮かぶことはなく、おそらく意識しないまま人生を送っていただろうとした。一方、相違点は CL1 が個人の興味を持つことや生活上の気づきであるのに対し、CL3 は他人との関係性に関わる連想語であるとした。CL1 と CL4 で共通しているのは、歴史を含めて、アジアの交流が現代までどういうふうに変化してきたかということで、相違点は日本語学習に関する連想語が CL1 は多く、CL4 は公文書の連想語以外は日本語とあまり関連性がない点だとした。CL2 と CL3 の共通点は、どち

らも日本国内で暮らしてみても気づいたことで、相違点は CL2 社会全般の話であるのに対し、CL3 は個人的な部分をカバーしている点だとした。CL2 と CL4 の共通点は特になく、相違点は CL2 はどちらかというとながティブなことが多い点であった。CL3 と CL4 の共通点は、日本語学習者であれば同じことを思うのではないかという点で、相違点は、CL3 は人間関係に関わる連想語がない点であった。そして、ここまでのインタビューを踏まえ、協力者 E は CL 全体について《僕と日本の関係（副題…好きと嫌いを超えた関係）》と名付けている。

PAC インタビューでは CL について話を聞いたあとに個々の連想語について説明を求める手順がある。本研究の連想刺激文は〈日本や日本語とつながって生きる〉ことがキーワードとなっているが、日本とつながって生きる部分については CL1 や CL2 の連想語、日本語に関わる部分は CL3 の連想語の中で語られた。以下、その部分についてまとめたい。なお、( ) で示したのは連想語の重要度順である。

具体的には、日本とつながるきっかけとして、「家族旅行」(12) を挙げ、1996 年に香港の旅行ブームを背景に初めて経験する海外旅行先が日本で、「家族全員に日本好きになった」とした。また、「日本食」(4) では、1990 年代に香港で日本食が普及しはじめ、香港の自宅近くに日系スーパーがあったことがあって、協力者 E にとって「親しみのある食文化」となったとした。また、「海外での日本の存在感」(23) では、プラレールが「自分が電車好きになったきっかけ」で「初めて香港で出会って遊んで、日本の文化、国の存在を知った」、その結果、成長する中でいろいろな面で日本という国の存在が目立つようになったと言い、プラレールが「日本に留学したきっかけの一つかもしれない」とも語った。「電車」(5) でも子供のときから、日本を知るきっかけ、日本語を勉強するきっかけ、すべての原点とした。CL2 では日本文化と自身とのつながりについて豊かに語った。

日本とのつながりを深めた経験には、「地震」(13) がある。協力者 E は日本に来て初めて地震を経験するが、その中でも留学中に経験した東日本大震災では、について母国の所属大学とも家族とももめたが、結果的に、母国の所属大学と原子力発電所の事故の影響が自身の健康に出たとしても大学の過失ではないことを確認した上で、留学を継続することができたと述べた。その背景には、「震災という大変なときに留学で出会った友達を見捨てて香港に戻るのは後ろめたい。」気持ちがあったとした。また、「ドラマ」(48) は「自分の日本語の学習材料」とし、ドラマと音楽を通じて幼少期より日常生活の中で日本語学習を続けてきた様子がかがえる。本格的に日本語学習を始めたのは 2008 年だが、その前に「プラレールの日本語を解説しようかな、漢字があって、おもしろいひらがなあったな、まだ読めなかったから少しずつ覚えていこうというステップから始めた」「がちゃがちゃ、日本の山手線駅名のがちゃがちゃあって、駅名の下にローマ字書いてあって、ローマ字とひらがなを覚えて、少しずつ覚えていった。日本語学校に入るまでにある程度、ひらがな覚えた」とした。

日本とつながって生きることに関することとして、「出身の大学で価値を判断される」(30) で最初の就職活動のときには、できれば日系企業で留学経験を生かせる仕事をして、日本で働き

たいと思っていたとした。留学経験を生かすことはほかの就活生との差別化の意味合いがあったが、日本で働くことについては、留学中に JASSO から奨学金を給付されたので、その「恩返しで、今度は自分が「税金で返そう」という気持ちがあったと語った。同様のことを「学生奨学金問題」(66)でも語り、日本で働いて税金という形で恩返しをする気持ちは、大学卒業時には持っていたとした。

日本に住むことについては、「円安」(9)で語られた。2016年に香港の日系企業に転職するきっかけは円安だったが、現在は日本在住であるとし、香港でデモに参加したことで「今後一切香港に戻らないという覚悟で暮らしている」と語った。ただ、居住先は「日本かイギリスか迷っている」とした。日本の永住権をとり、イギリスも国籍も持ち、どちらも選択できるよう準備をしている。居住先として日本に魅力があると思える点は、日本食や日本文化以外に、「時差がほぼないというのはすごい助かる」(40)、「とにかくきれい(清潔、という意味で)」(45)があり、日本での居住を迷う点は、「日本のマンション、安くて質が良い。買いたい」(22)で「地震という問題がなければ、まっさきに日本でマンション買ったかもしれない。」とする。また、「永住者の投票権問題」(17)、「移民受け入れ」(21)、「政治家、何やっているかわからない」(18)など日本政府の方針や日本国内での議論が要因となっていることがわかる。

以上のような述懐から、協力者 E は、幼少期からの日本文化と親しんできたが、日本留学で奨学金が給付された経験や留学先での交友関係から日本との関係をさらに深め、日本への「恩返し」の意味で日本とつながって働くことを選択した。母国の政情の変化から将来の居住先は香港ではなく日本か英国かを考えているが、今後も日本とつながって生きていく意思があることがわかる。協力者 E は大学卒業後、日本とつながって仕事をする点は一貫しているが、様々な要因から転職をし、将来の居住先は現在日本か英国かの両方を見据えて準備を整えていることが発話から読み取れる。インタビュー時の協力者 E の意識が、どのような経験に基づいているかを丁寧に見ていくために、TEM 図を描くためのインタビューを 2 回実施した。次節ではこれらのインタビューを踏まえて作成された TEM 図を示し、分析を行う。

## 4.2 TEM 図に基づく分析

### 4.2.1 分析のための枠組み

まず、TEM 図の最少単位を形成する概念として、等至点 (Equifinality Point: EFP)、分岐点 (Bifurcation Point: BFP)、非可逆的時間があり、その他の基本概念として、両極化した等至点 (Polarized Equifinality Point: P-EFP)、第 2 の等至点 (2<sup>nd</sup> Equifinality Point: 2<sup>nd</sup> EFP)、第 2 の両極化した等至点 (2<sup>nd</sup> Polarized Equifinality Point: 2<sup>nd</sup> P-EFP)、分岐点 (Bifurcation Point: BFP)、必須通過点 (Obligatory Passage Point: OPP)、社会的方向づけ (Social Direction: SD)、社会的助勢 (Social Guidance: SG) などがある (安田 2023)。本研究における概念の意味は表 2 の通りである。

表 2 TEM 図に関わる諸概念と本研究における具体的概念

概念	本研究における具体的意味
等至点 (EFP)	日本や日本語と関わりを持ち続けて、日本で生活する
両極化した等至点 (P-EFP)	日本や日本語と関わりを持ち続けて日本で生活することを諦める
第2の等至点 (2 <sup>nd</sup> EFP)	日本に住まないとしても、日本や日本語と関わりを持ち続けて生きる
第2の両極化した等至点 (2 <sup>nd</sup> P-EFP)	日本や日本語と関わりを持ち続けて生きることを諦める
分岐点 (BFP)	① 日本に留学する ② 東日本大震災に遭う ③ 香港にある日系企業に勤務する ④ 香港のデモに参加し、移住先として日本を考える
必須通過点 (OPP)	① 日本がいいと思う ② 日本に留学する ③ 日本でやっていける、日本で生活していきたいと思う
社会的方向づけ (SD)	① 円高：日本滞在中の生活費が心配 ② 地震：地震に対する不安 ③ 円安：日本で得る収入の価値が目減りする ④ 勤務状況：日本で地方勤務になる ⑤ 勤務状況：日本の企業と香港の企業とで働き方（特に評価のしかた）が違ふ ⑥ 勤務状況：香港の方が給与が高い ⑦ 政治的環境：英国が香港からの移住を受け入れる方針を出す ⑧ 社会制度：社会福祉（医療費、救急搬送費）は香港のほうが安価である
社会的助勢 (SG)	① 家庭環境：日本食や日本のおもちゃ（プラレール等）への接触の機会が多い ② 家庭環境：母の子供への思いと期待（自分は学歴が高なくて苦労したので子供には同じ苦労をさせたくない、自分ができなかったことを子供にしてほしい、出世してほしい） ③ 家庭環境：家にパソコンがあった ④ 社会環境：飛び級の仕組みがあった、進学先の大学が自宅の近くにあった ⑤ 社会環境：協力者 E が生まれたころには香港の経済成長が完成しており、レゴなどが輸入品として生活に密着していた ⑥ 社会環境：日本のビジネスや文化が香港で受容された（歌謡曲、日系スーパー、アニメ等） ⑦ 家庭環境：受験後、母親が協力者 E の生活に口を挟まなくなった。さぼっていても黙認。卒業できればいいという雰囲気 ⑧ 留学制度：所属大学に3つの留学ルートがあり、協力者 E に留学できる選択肢があった ⑨ 奨学金制度：給付型奨学金を受給することができた ⑩ 友だち：留学中、留学後に会った日本の友人 ⑪ 留学制度：所属大学で交換留学による日本からの学生と交流できる制度があった ⑫ 政治的環境：雨傘運動が起きる ⑬ 日本の外国人受け入れ政策：外国人労働者の受け入れが進み永住権が短期間で取りやすくなった

#### 4.2.2 日本・日本語と関わって生きることに対する協力者Eの意識の変容

本研究が分析の対象としたTEM図の凡例を図2、協力者Eが2<sup>nd</sup> EFP「日本に住まないとしても、日本や日本語と関係を持ち続けて生きる」に至るまでの経験を図3に示した。

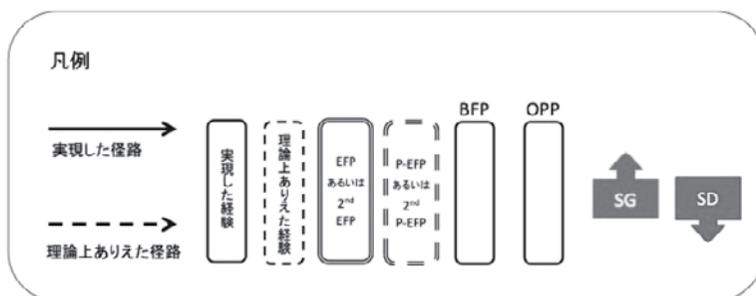


図2 凡例

TEM図で示した時間は、下の第Ⅰ期から第Ⅳ期の4つの期間に区分した。

- 第Ⅰ期 香港での幼少期から大学に入学するまで
- 第Ⅱ期 大学入学から、卒業し、初めの就職先を決めるまで
- 第Ⅲ期 就職により渡日してから、転職のために香港に戻り、再び渡日を決めるまで
- 第Ⅳ期 転職のために再び日本に戻ってから現在まで

以下、図3で表したBFP①～④の分析結果を中心に協力者Eの語りを区分ごとに記述する。

##### (1) 第Ⅰ期 香港での幼少期から大学に入学するまで：BFP①以前

香港は、1980年代からジャスコ（現在のイオン）が進出しており、協力者Eが生まれた1990年代は香港全体に経済力がついており、日本の商品やアニメなどの文化が香港に流入していた時期である。協力者Eが日本という国すら認識しない頃から電車のおもちゃ、プラレール等の日本のおもちゃで遊んでおり、日本と接点があった。当時香港はイギリス領だったので、勉強では、イギリスの教科書をそのまま使ったり、法律がイギリスのものだったり欧米文化が自然に入っており、同時に中国の文化も残っていた。例えば西洋医学の病院に通うが、体調を整えるのは漢方を使うといった形である。そのように東洋文化と西洋文化が共存する地域に日本文化が流入した。アジアの一国である日本が経済発展をしていく姿は、特に戦後生まれの香港の人「東洋でもこんなに発達していくんだ」ということを気づかせてくれた。NHK紅白やドラえもんといったテレビ番組は香港でそのまま放映されていた。

1990年代半ばには、海外旅行ブームが起きおり、形態はツアー旅行が主流だった。協力者Eの家庭は特別に裕福な家庭というわけではなかったが、協力者Eが小学校に入学する前に、家族で日本ツアーに参加した。それ以降、母親が日本食（寿司）を好むようになり協力者Eも2年生

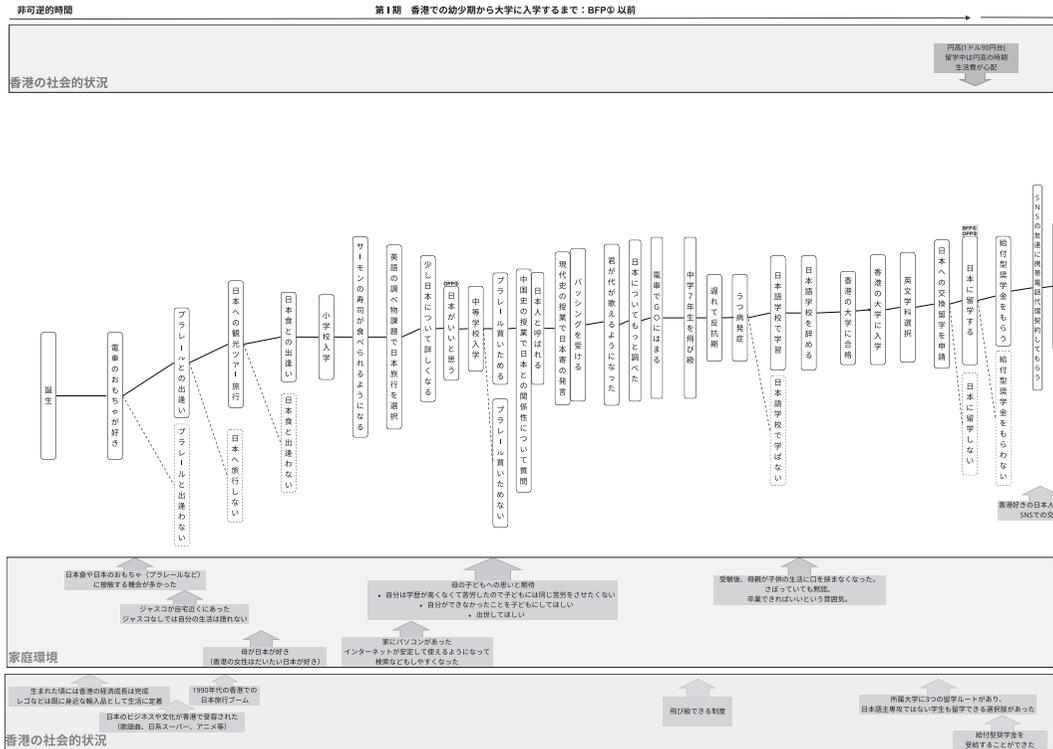


図 3-1 協力者 E の TEM 図 (1/3)

ごろから食べるようになった。このころは毎日遅くまで勉強させられていたが、夜食は日清のカップラーメンであった。このような経緯から、協力者 E は日本とつながっていくきっかけは、「自ら求めた」というよりも「親の影響が強い」「親がそのきっかけをもたらしてくれた」と分析している。

小学校 5 年生のころには旅行先についての調べ学習があり、協力者 E は親の影響で日本を選んで深く調べたりもした。自宅近くにあるジャスコは、それなしには協力者 E の当時の生活を語れないほど身近な存在で、プラレールを通じて日本の鉄道の魅力に惹かれる中で、日本へのイメージが膨らんでいき、＜日本がいいと思う＞（OPP ①）ようになった。

中学に入ると歴史の学習が始まった。協力者 E はなぜか「日本へのこだわりが強く」、「日本人」というあだ名をつけられた。中学 3 年生になって現代史に入り、掲示板に日本よりの発言を書いたことでバッシングを受けた。これがきっかけで、歴史への興味に目覚めるようになる。日本に対していいイメージしかないというマインドセットが出来上がっていたので、日本に肩入れした発言でバッシングを受けたときも、「自分が正しい」と思いこんでいた。

中学のころ、香港の経済が回復し、再び海外ブームが起きたが、両親が離婚して経済的に余裕がなくなっていたので協力者 E は日本へ旅行に出かけられず少し悔しい思いをした。自宅には

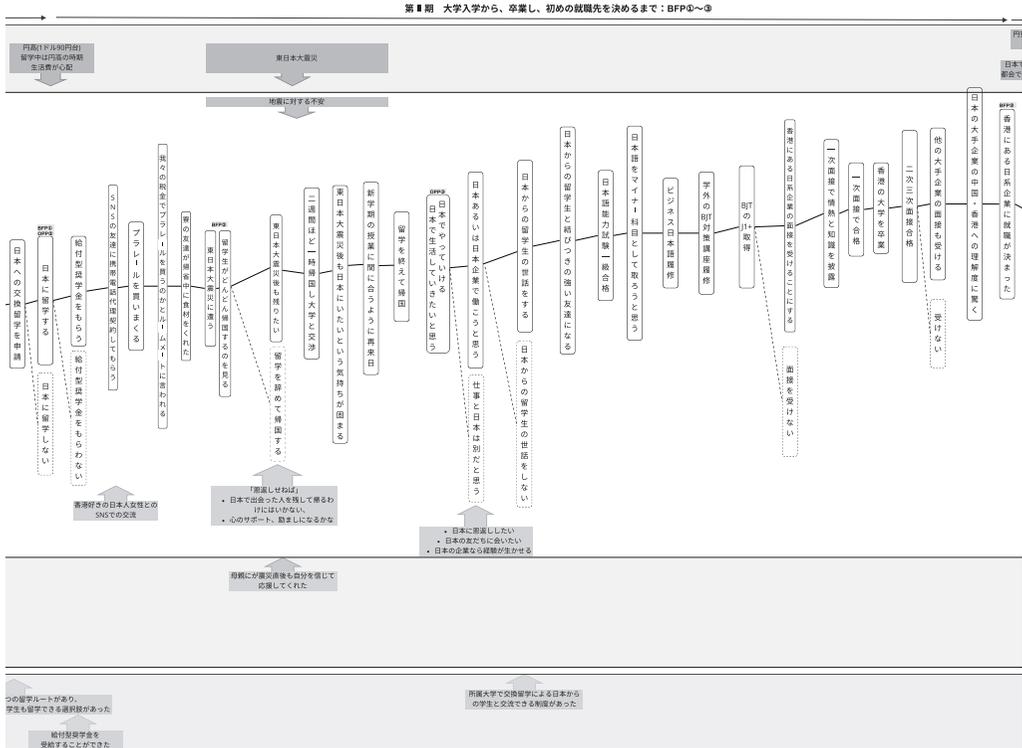


図3-2 協力者EのTEM図(2/3)

PCがあったのでネットで日本についていろいろ調べるようになり、「電車でGO」というゲームに夢中にもなった。

香港には飛び級の制度があり、年間数万人が受験して200～300人が飛び級で大学に入学できる。協力者Eは小学校入学以降、毎日家で十何時間も勉強させられて、これに合格した。H香港は競争が激しいので、勉強熱心な家庭が多い。母親は、自身があまり高学歴ではないので息子に学歴をつけさせ苦労しない人生を歩んでほしいという思いを協力者Eに押し付けた面がある。協力者Eとしても経済力があるわけではないので、親の言うことに従うしかなかった。飛び級に受かり大学進学が決まったあと、反抗期が一気に爆発し、日本語学校に通った。約2か月の集中コースを履修したところで、どのような教科書を購入すればいいか、どのような方法で学習すればいいかがわかり、自分でできる見通しがついたので、独学することにした。母親も受験が終わって時間があるので、日本語学校に通ってもいいという態度で、勉強への拘束から一気に解放された。

進学先の大学の選択は、香港ならここだねというブランド性からで、専攻に対するこだわりはなかった。自宅から通える点も魅力があった。専攻は日本研究であれば1年の日本留学が必修になるので非常に魅力があったが、母親がやや反対だったのと、日本研究でなくても日本留学への

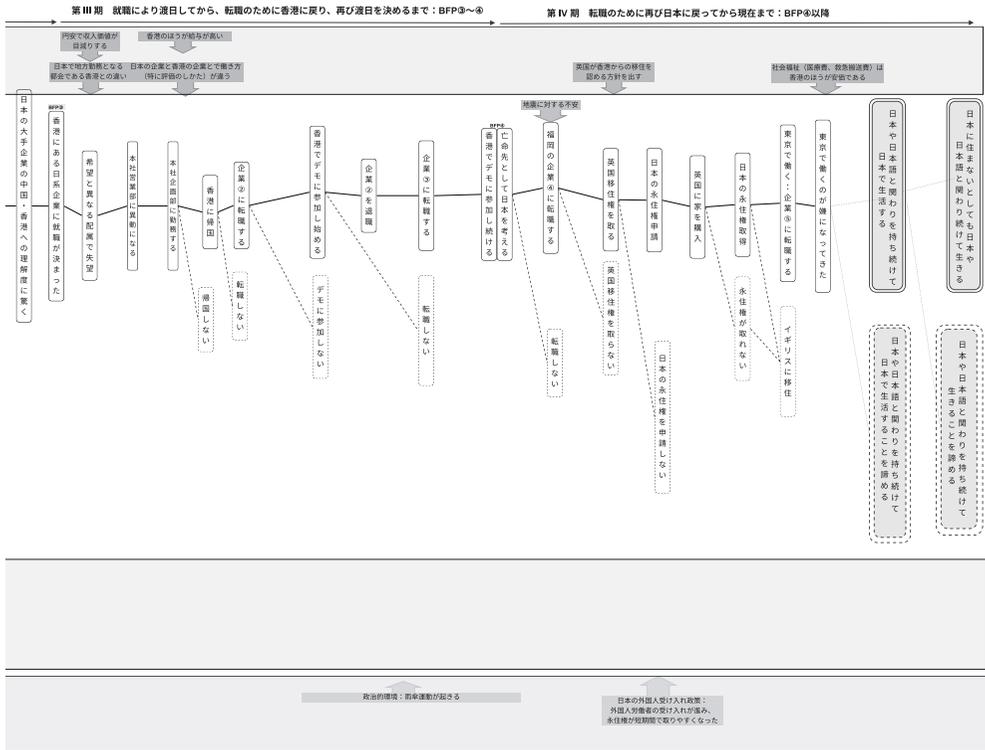


図 3-3 協力者 E の TEM 図 (3/3)

道が開かれていることがわかり、英文学科にした

(2) 第II期 大学入学から、卒業し、初めの就職先を決めるまで：BFP ①～③まで

進学先の大学には留学のルートが3種類あった。日本研究を専攻して留学するルート、学部間協定を活用するルート、大学間協定を活用するルートである。3つ目のルートは競争倍率が非常に高かったのであきらめて、学部間協定を活用するルートを選んだ。交換留学先は google map で確認して選択した。留学に際しては日本語力の不安はなかったが、円安の影響を受けてく日本に留学する> (BFP ①、OPP ②) ことになったため、経済的な不安があった。そのような時に給付型の奨学金を受給でき本当に助かった。

PAC インタビューでは日本への「恩返し」というキーワードが出るが、それは奨学金のほかに、いろんな人に出会えたことがある。例えば、留学当時は、協力者 E は日本だと未成年だったので携帯電話の契約ができなかったのだが、そのときにブログで出会った香港好きの日本人が助けてくれた。また、寮で出会った日本人の友人が、東日本大震災のために帰省を決めたときに協力者 E のために食材を残してくれたといった経験もした。そういった経験があったので、<東日本大震災に遭い>、<他の留学生がどんどん帰国するのを見る> (BFP ②) 中で、自分も日本でも出会

った人たちを見捨てて一人で帰国していいのかという思いが起き、日本に留まる決断をした。自分があることが周囲への励ましになるなどの効果があるかは別として、日本を見捨てる姿勢を見せてはいけないと思った。このときに「恩返し」という気持ちが芽生えた。それで、いったん2週間ほど香港に帰国はしたが、その間に所属大学とも留学先の大学とも交渉をして留学を継続できることになった。交渉の際には母親が力になってくれた。

協力者Eは大学受験のあと、うつ病を発症した。母親はおそらくそのことに罪悪感をもち、今後は協力者Eの意思を尊重する方針に切り替えたのだと思う。

苦労して継続を実現させた留学は、それに値するものがあつた。特に東日本大震災のときは、ほかの人がなかなか体験できないような経験をしたり、留学先では日本語だけを使っていたことが功を奏し、日本人の友だちができた。留学は全体としてポジティブな経験になったし、好きなプラレールも手に入れることができた。旅行もでき、人生を変えてくれるような機会になった。

留学中の日本語プログラムは個人的にとても良かったと思う。例えば、日本の社会問題を理解し深い議論ができるようになった。就活では社会問題を聞かれたりするが、日本語クラスを通じて身に付けたスキルは就活でも生かせたと思う。日本語科目だけでなく日本語が教授言語の専門科目にもチャレンジした。歴史（明治維新）についての講義が英語で行われていて、大変興味深かった。＜日本とつながってやっていける＞という自信もてて、＜日本で生活していきたいと思った＞（OPP③）のは、今振り返ると、留学が終わった後である。

留学中は部活に入っていなかったので人数は多くないが、今でもつながっている友人ができた。人数としては留学後に、所属大学のバディプログラムで、日本からの留学生をサポートする活動を通じてできた友人が多い。バディプログラムは、「恩返し」という気持ちもあるが、友だちづくり、留学の延長上にとらえたので、「情熱をこめて」受け入れようと思った。自身の経験から留学で一番大変なことがよくわかっているのだから、香港に来る前に具体的な助言をしたり、到着直後のサポートをしたりした。日本語がよく話せて現地をよく知っている友人の存在は日本人留学生にとって「ありがたい存在」だったと思う。それで日本留学していた頃よりも、日本人学生とよく遊んだ。

帰国後は日本語をマイナー科目として履修し、BJT対策科目も受けた。ビジネス経験のある日本語教師の授業で非常に役に立った。履歴書的にも JLPT だけでなく BJT も入れたいと思った。このように日本語学習を継続していたことには、日本で働きたい、日本企業で働きたい、日本語を使って働きたいということを考えていた。背景には「恩返し」がある。「恩返し」は日本に戻らないとできないということ、日本の友人と再会したいという気持ちが強かったこと、そして香港の政情面の変化、日本の産業構造が香港の金融偏重の産業構造でないところを好ましく思ったことがある。

卒業の1年前に、日本語の先生から「練習だと思って受けてみたら」と勧められ、初めての就職先となる企業の面接を受けた。電車の部品を製造している会社だったので、自身の情熱が伝わったのか、1次面接に合格し、卒業の数か月前に東京でさらに面接を受けて、＜香港にある日系

企業への就職が決まった> (BFP ③)。他の企業も就職試験を受けたが、決まったのはこの1社だった。香港にいながら日本で働くための就活を行うのは無理があると感じた。

(3) 第Ⅲ期 就職により渡日してから、転職のために香港に戻り、再び渡日を決めるまで：BFP ③～④まで

日系企業への就職により渡日した。初めの配属先は協力者Eの期待に反して、地方で、また電車の部品とあまり関係のない部署だった。工場を知るための配属ということだったが、香港で育った都会っ子で、車を持たない、自転車に乗れない協力者Eにとっては、今振り返ると日本の生活の中で一番「ハードルが高かった時期」であった。ちょうどその頃円安が進んでいて、物価の高い香港で買い物をしたりすると全く貯金ができず、のちに会社を辞めるきっかけになった。1年後勤務地が東京になった。友人に再会することができ、よかった。営業の仕事で中国に出張することが多かったが、中国が好きではなくきついという事情を上司に話したところ、理解され、企画の仕事をするようになった。しかし、中国への出張を嫌がったために自分への評価が下がり、1年間昇給しないと言われたことで、勤務意欲が一気に低下した。

同時に、香港政府からの奨学金の返済に追われていたこと、思ったよりも日本で友人と再会するチャンスがなかったこと、香港は雨傘運動が起きていて自身もデモに参加していたものの、まだ「お金を稼げる」都市であったこと、香港に戻れば母親が日常的な世話をしてくれることなどの魅力から香港に戻ることを決めた。

1か月くらい就職活動をして、運よく香港にある日系企業への転職が決まった。転職先は職場の人間関係が大変よく、協力者Eは現地社員と駐在員との「架け橋」になれた。3年くらい楽しく仕事ができて、仕事の成果も上がったが、だんだん限界が見えるようになり、ボーナスが思ったよりも出ないことにも不満を持つようになって転職を考えるようになった。ちょうどそのタイミングで友人から日系企業への誘いがあり、就職試験を受けたところ合格した。もとの職場に転職の話を出しながら昇給の交渉を試みたが、そのようなことができる給与制度になっていないことがわかり失望し、転職を決断した。

協力者Eにとって、居心地のよさ、成長できること、給与が仕事の大事な要件になっている。転職先でも楽しく仕事をしたが、3年ほど経って自身と職場の両方が「成長していないな」と思うようになり、職場に魅力を感じなくなった。デモにもひきつづき参加したが、状況はどんどん悪化していった。このような中で、日本で起業している友人が声をかけてくれ、転職して再び日本に戻ることにした。

(4) 第Ⅳ期 転職のために再び日本に戻ってから現在まで：BFP ④以降

新しい勤務先は九州で、スタートアップ企業の契約社員だった。イーコマースの業界で、協力者Eは一から勉強しなくてはならなかったが、転職歴があるので、それは苦にならなかった。それよりも経営方針がよく変わることにについていけないところがあったが、協力者Eの目標は永住

権の獲得だったので勤務を続けた。留学のときも、初めての就職のときも永住権獲得のルートがなかったが、日本の外国人労働者受け入れ政策の流れの中で、晴れて高度専門職の枠で、永住権を得ることができた。このころ、英国ではイギリス国籍を持っている香港人の移住を認める計画が打ち出されていたので、居住先について迷うところもあった。日本の永住権をとりつつ、英国のマンションを購入し、次の転職が可能な態勢をとった。

そのようなタイミングで、役員の一人在東京で新しい会社を立ち上げることになり、一緒に東京で働くことにして現在に至る。ここでまた「運命が変わった」感じがする。

イギリス領だったのが中国に返還されるということからもわかるように香港は土地柄、自分で自分の将来を決められない。そういったことから自分を守るために、財産を守り、自分なりに計画を立て柔軟に生きるという気質がある。柔軟性をもって行動することが日常生活の中で鍛えられる部分もある。動きが鈍いと母親に叱られたりもする。昔は母親に依存していたが、留学経験を通じて一気に自立した。岐路に立ったときには母親に「AプランがダメだったらBプランで行きます。BプランができなかったらCプランで行きます。そのための準備は、これはできています、この準備はまだやっています」といった報告を常にして信頼を得ている。結局頼れるのは母親しかいないと思っている。

居住地を日本にするかイギリスにするかという話では、母親が自分の居住地に引っ越してこられるか、そこで生活できるかについての母親自身の意見も影響している。母親は、言語はともかく、食文化の観点から日本のほうを選ぶと言っている。一方、協力者Eが日本と切っても切れない気持ちでいるのは、つきつめて考えると、日本食が手に入るかどうかといった食文化の話より、「人とのつながり」があるからである。

日本語力については、駐在員スタッフに「日本人だと思っていた」と言われるほどのレベルの高さにある。本人としては、日本語学習をした期間は、中学5年生から大学卒業までが意識としてある。日本語を学習したことは、日本への理解を深め、世界を広げた。ニュースや新聞を日本語で理解できるようになったことで、日本の社会問題を身近に感じるようになった。例えば日本の少子高齢化政策は香港では通用しないというようなことも考える。日本語の勉強を通して友だちができ、いろいろな話を聞けるようになって、実際の日本人の生活、悩み、好き嫌いが情報として入るようになり、日本への理解が一気に深まった。英語が通用する国ではないので、日本語でないと伝わらない情報もあるとも感じている。

#### 4.2.3 日本・日本語と関わって生きることに對する協力者Eの徑路に影響を与えたSDおよびSG

本節ではどのような経験が日本・日本語と関わって生きることに影響を与えているのかを考察するために、協力者Eの意識の変容に影響を与えたとと思われるSDとSGを見る(表2)。

まずSDは、日本で働き生活するという強い希望の実現を阻害した要因である。協力者Eにとっては、<円高：日本滞在中の生活費が心配><地震：地震に対する不安><円安：日本で得る

収入の価値が目減りする><勤務状況：日本で地方勤務になる><勤務状況：日本の企業と香港の企業とで働き方（特に評価のしかた）が違う><勤務状況：香港の方が給与が高い><政治的環境：英国が香港からの移住を受け入れる方針を出す><社会制度：社会福祉（医療費、救急搬送費）は香港のほうが安価である>がある。

これらを大きく分類すると、経済的課題（円高、円安、給料）、生活のしやすさ（都会か地方か、社会制度）、自然環境（地震）、政治的環境（政情不安、製作）となろう。協力者Eは、香港の人について、自分では政情変化などコントロールできない状況から、自分を守るために、財産を守り自分なりに計画を立て柔軟に生きるという気質があると語り、自身が転職を繰り返す際にも、当初の計画が遂行できなかった場合の次の策を考えながら行動しているとする。インタビューでは、岐路にたったときの判断材料が、自身の人生（生活）を守りながら柔軟に生きるのに必要な要素で組み立てられていることがわかる。

一方、SGは<家庭環境：日本食や日本のおもちゃ（プラレール等）への接触の機会が多い><家庭環境：母の子供への思いと期待（自分は学歴が高なくて苦労したので子供には同じ苦労をさせたくない、自分ができなかったことを子供にしてほしい、出世してほしい）><家庭環境：家にパソコンがあった><社会環境：飛び級の仕組みがあった、進学先の大学が自宅の近くにあった><社会環境：協力者Eが生まれたころには香港の経済成長が完成しており、レゴなどが輸入品として生活に密着していた><社会環境：日本のビジネスや文化が香港で受容された（歌謡曲、日系スーパー、アニメ等）><家庭環境：受験後、母親が協力者Eの生活に口を挟まなくなった。さぼっていても黙認。卒業できればいいという雰囲気><留学制度：所属大学に3つの留学ルートがあり、協力者Eに留学できる選択肢があった><奨学金制度：給付型奨学金を受給することができた><友だち：留学中、留学後に出会った日本の友人><留学制度：所属大学で交換留学による日本からの学生と交流ができる制度があった><政治的環境：雨傘運動が起きる><日本の外国人受け入れ政策：外国人労働者の受け入れが進み永住権が短期間で取りやすくなった>がある。これらは、社会環境、家庭環境、留学制度、奨学金制度、政策、人間関係に分類できる。

香港で日本の商品（プラレールなどの電車のおもちゃ）や日本文化（アニメ、日本食）が普及していたことや、家族が日本好きであったことは協力者Eを日本に向かわせる要素となっている。交換留学制度や奨学金制度は、日本に強い関心を持つ協力者Eの日本での留学生活を実現させ、充実したものになるように必要な要素であった。日本の外国人労働者受け入れ政策は、協力者Eが日本で生き続けるという選択を実現するのに必須の要素である。そして、人間関係は、協力者Eが日本と切っても切れない気持ちでいることについてつきつめて考えると、日本食が手に入るかどうかといった食文化の話より、「人とのつながり」だと述べたように、留學生活、仕事生活、転職などのエピソードに共通して出てくるキーワードである。協力者Eは、将来の居住先として日本と英国の両方を視野に入れているが、この選択にも頼れる人がいるかどうか重要な要素となっていることが語りの中からうかがえる。

## 5. 考察とまとめ

本稿は PAC 分析インタビューと TEM により協力者 E が 2<sup>nd</sup> EFP <日本や日本語と関わりを持ち続けて生きる>に至る径路を分析し、日本・日本語と関わって生きることに對する調査協力者 E の径路に影響を与えた SD および SG を捉えた。

本研究は、EFP を <日本や日本語と関わりを持ち続けて、日本で生活すること>と想定して HSI に基づき協力者 E を研究協力者として「お招き」したが、インタビューを続ける中で、協力者 E は、将来の居住先は日本と英国の両方を視野に入れていと語っている。一方で、日本とは切っても切れない関係にあるという気持ちであり、これからも日本と関係をもって生きていくことを心に決めている。このような協力者 E の考えは筆者らが想定した EFP と異なることから、本研究は協力者 E にとっての EFP である第 2 の等至点、すなわち 2<sup>nd</sup> EFP を設定して TEM 図を描く必要があると考えるに至り、これを <日本に住まないとしても、日本や日本語と関わりを持ち続けて生きる>と設定することとした。丸山・小澤 (2020) も 2<sup>nd</sup> EFP を設定したが、本稿の分析もこれと同じ経過をたどったことになる。

本研究から見えてきたのは、丸山・小澤 (2018、2019、2020) との共通点としては日本や日本語とつながって生きることの魅力であるが、相違点は、東日本大震災も経験した日本留学が協力者 E 自身も自覚しているとおり、協力者 E の人生に大変大きな影響を与えたということである。協力者 E は留学中に給付型奨学金を受給できたことに恩義を感じており、これは「恩返し」という表現の一部に含まれて表れる。協力者 E は、香港政府からの貸与型奨学金も受けており、大学卒業後奨学金の返還に苦勞していることから、給付型奨学金の恩恵を身に染みて感じた可能性がある。「恩返し」の気持ちは東日本大震災のときに表出した。他の留学生がどんどん帰国していく中で、自分も日本で出会った人たちを見捨てて一人で帰国していいのかという思いが起き、日本に留まる決断をした。日本で出会った人たちへの恩返しの気持ちも日本への就職につながったと言う。第 IV 期の語りでは、昔は母親に依存していたが、留学経験を通じて一気に自立したと述べている。大学受験まで毎日十時間も自宅で勉強をしていて交友関係をほとんどもたなかった協力者 E にとって、日本留学は、あこがれていた日本文化の満喫・発見、交友関係の拡充と、親からの自立が重なった急激な成長のときであったことがわかる。留学中、留学後にできた友人との再会への希望は、協力者 E の転職の動機の一つになっており、人とのつながりは、自分が日本と切っても切れない関係にあるという気持ちでいる要因になっている。

丸山・小澤 (2018、2019、2020、2021a) は、日本や日本語とつながって生きることを選択する要素に、現地の人とのつながりが少なからずあることを指摘しているが、本稿は人とのつながりが非常に大きな要素となっていることを示す内容となった。

外国人労働者の受け入れ拡充に合わせて、日本語教育人材の育成、日本語教育機関の整備について検討が進められている (文化庁、2019、2022)。こういった政策は最終的にどういった日本語教育の現場を作ることができるのかにかかっているが、今回の研究結果は、この現場を教室の中

だけにとどめず、日本語学習者のキャリア形成を視野に入れる必要があることを示唆している。

#### 注

本研究は科学研究費「「日本とつながって生きる」選択に見る日本語教育の新時代——元留学生の自己実現——」（基盤（C）課題番号 20K00707）の研究活動の一部である。

#### 参考文献

- 上村佳世子（2018）「文化心理学」能智正博他（編）『質的心理学辞典』新曜社、277.
- 小澤伊久美・丸山千歌（2019a）「留学体験を持つ日本語学習者 X が日本に住み、働き続ける径路——X は分岐点でどのような葛藤を経験しているか——」沖縄県日本語教育研究会、琉球国際大学、2019年3月9日.
- 小澤伊久美・丸山千歌（2019b）「日本に住み、働き続ける径路に表れる日本留学、日本語学習経験」（小澤伊久美との共同ポスター発表）、CAJLE2019年次大会、於カナダ、ビクトリア大学、2019年8月7日 [https://www.cajle.info/wp-content/uploads/2019/09/30\\_CAJLE2019Proceedings\\_Ozawa-Ikumi-and-Maruyama.pdf](https://www.cajle.info/wp-content/uploads/2019/09/30_CAJLE2019Proceedings_Ozawa-Ikumi-and-Maruyama.pdf).
- 上川多恵子（2023）「TEA の基本概念一覧」サトウタツヤ・安田裕子（監修）、上川多恵子・宮下太陽・伊東美智子・小澤伊久美（編）『カタログ TEA——図で響き合う』第3章、新曜社、5-10.
- 木戸彩恵（2019）「文化心理学の基本的射程」木戸彩恵・サトウタツヤ（編）『文化心理学：理論・各論・方法論』第1章、ちとせプレス、3-13.
- サトウタツヤ（2019）「記号という考え方——記号と文化心理学 その1」木戸彩恵・サトウタツヤ（編）『文化心理学：理論・各論・方法論』第3章、ちとせプレス、27-39.
- サトウタツヤ・安田裕子（監修）（2023）、上川多恵子・宮下太陽・伊東美智子・小澤伊久美（編）『カタログ TEA——図で響き合う』新曜社.
- 佐藤正則（2015）「なぜ私は学習者のライフストーリーを聴き続けるのか 日本語教師としての私の構えを記述することの意味」館岡洋子編『日本語教育のための質的研究入門 学習・教師・教室をいかに描くか』ココ出版、117-137.
- 内藤哲雄（2002）『PAC 分析実施法入門 [改訂版] 「個」を科学する新技法への招待』ナカニシヤ出版.
- 入国管理局（2018）「入管法および法務省設置法改正について」『入国管理局ホームページ』[https://www.moj.go.jp/isa/laws/h30\\_kaisei.html](https://www.moj.go.jp/isa/laws/h30_kaisei.html)（2023年1月8日アクセス）.
- 文化庁（2019）「日本語教育の推進に関する法律の施行について（通知）」[https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka\\_gyosei/shokan\\_horei/other/suishin\\_houritsu/1418260.html](https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyosei/shokan_horei/other/suishin_houritsu/1418260.html)（2023年1月7日アクセス）.
- 文化庁（2022）「日本語教育の質の維持向上の仕組みについて（報告）（案）」[https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo\\_nihongo/kyoiku/ikenboshu/nihongoiken\\_shitsu/pdf/93803001\\_01.pdf](https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kyoiku/ikenboshu/nihongoiken_shitsu/pdf/93803001_01.pdf)（2023年1月4日アクセス）.
- 丸山千歌（2016）「学習者要因の分析①——PAC分析を活用した研究」徐敏民・近藤安月子（編）『日

- 本学研究叢書『日語教学研究』外語教学与研究出版社、362-384.
- 丸山千歌・小澤伊久美（2018）「ある翻訳者が自立に至る径路——移動して学ぶ時代の日本語教育への示唆——」『立教日本語教育センター紀要』1、19-35.
- 丸山千歌・小澤伊久美（2019）「日本語学習者の人生の径路に表れる日本との接触——日本に住み、働きつづける日本留学経験者Bの場合——」『日本語・日本語教育』2、19-38.
- 丸山千歌・小澤伊久美（2020）「日本語学習者の人生の径路に表れる日本との接触——日本に住み、働きつづける日本留学経験者Dの場合——」『日本語・日本語教育』3、33-47.
- 丸山千歌・小澤伊久美（2021a）「日本語学習者の人生の径路に表れる日本との接触——日本に住み、働きつづける日本留学経験者Cの場合——」『日本語・日本語教育』4、35-54.
- 丸山千歌・小澤伊久美（2021b）「多声モデル生成法としての複線径路等至性アプローチ」『母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）学会 2021年度研究大会 大会予稿集』、66-67.
- 丸山千歌・小澤伊久美（2022）「多声モデル生成法としての複線径路等至性アプローチのための試論」『日本語・日本語教育』5、51-68.
- 安田裕子（2019）「TEA（複線径路等至性アプローチ）」サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真美（編）『質的研究法マッピング——特徴をつかみ、活用するために』第1章2節、新曜社、16-22.
- 安田裕子（2023）「採録 オンライン講習会 TEA 基礎編——TEMを理解する」サトウタツヤ・安田裕子（監修）、上川多恵子・宮下太陽・伊東美智子・小澤伊久美（編）『カタログ TEA——図で響き合う』第10章、新曜社、91-101.（印刷中）.
- やまだようこ（2020）『やまだようこ著作集 第4巻 質的モデル生成法——質的研究の理論と方法』新曜社.
- Ozawa, I. & Maruyama, C. (2019). "The Trajectory of an Ex-Student of Japanese Language on Choosing Japan as the Place of Living." The 1st Transnational Meeting on TEA, at Ritsumeikan University OIC, Mar. 2nd, 2019.